5

重点地域の色彩ガイドラインの提案

5-1

重点地域の色彩ガイドラインの考え方

5-1-1　重点地域について

県内には、独自の景観条例を施行している市町や、住民が主体となって景観形成住民協定を締結している地区があります。

これらの地域や地区は、独自の景観形成基準や指針を設けており、景観形成地域に準じた景観づくりを進めています。

ここでは、これらの地域・地区のうち、県の景観施策のうえでも重要な役割を担う、熊本市中心部の2つの地域と、歴史的な面影を残す3つの歴史的まちなみ地区を重点地域としてとりあげ、その色彩ガイドラインを提案します。

- 1―熊本城周辺地域
- 2―水前寺・江津湖周辺地域
- 3―歴史的まちなみ地区
  - 熊本市川尻地区
  - 菊池市御所通り地区
  - 不知火町松合本通り地区

5-1-2　色彩ガイドラインの位置づけ

- 1―熊本城周辺地域
- 2―水前寺・江津湖周辺地域

熊本市では、『熊本市都市景観条例』により、大規模建築物等景観形成指針を定めています。

さらに、上の2つの地域については、地域特別指針を設け、特別な配慮を要請しています。

ここでは、両地域における色彩景観づくりの方向性や、両地域にふさわしい色彩と配色を提案します。

- 3―歴史的まちなみ地区

ここに挙げた歴史的まちなみ地区では、それぞれの地区において、住民が主体となった積極的な景観づくりが進められており、熊本県景観条例第16条に基づき、景観形成住民協定として県知事の認定を受けています(熊本市川尻地区を除く)。

ここでは、熊本を代表する3つの歴史的まちなみにおける色彩景観づくりの方向性や、これらの地域にふさわしい色彩と配色を提案します。

5-1-3　重点地域における届出と手続き

重点地域における届出や手続きは、『熊本市都市景観条例』や各地区の景観形成住民協定などの定めるところに従って進めてください。

5-2

熊本城周辺地域

5-2-1　熊本城周辺地域の範囲

熊本市が指定する熊本城周辺地域は、下の図に示した、熊本城を中心とする地域です。

5-2-2　景観形成の基本的考え方

熊本城は県都熊本市を代表する歴史的遺産であることから、熊本市の都市イメージを高めていくために、以下に示すような「熊本城を要とした景観づくり」を進めます。

●1―ランドマークとしての熊本城への眺望の確保

天守閣をはじめ、櫓、石垣、樹木等の熊本城のイメージを喚起するものが周囲の市街地から可能な限り見えるようにします。

●2―熊本城からの眺望の確保

熊本市を代表する「都市景観の構図」である、遠景の山脈と近景の城内の樹木、およびそれらにはさまれた市街地の眺望景観を可能な限り確保します。

●3―市街地と熊本城との間のゆとりある眺望の確保

熊本城域縁辺部の石垣と坪井川に直接接する市街地では、熊本城との間にゆとりある眺望を確保します。

5-2-3　熊本城周辺地域の景観形成指針

熊本市では、次の表のような景観形成指針と地域特別指針を設定しています。

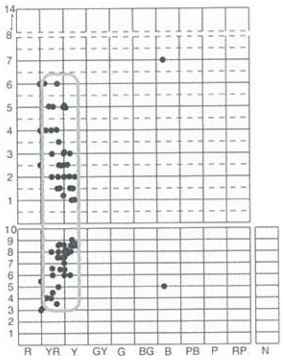
■表　熊本市大規模建築物等景観形成指針（色彩に関するもの）

建築物工作物	外観	基調となる色は、周囲の自然やまちなみの色調と調和したものとし、アクセントとなる色はごく限られた箇所に限定するように努めること。
広告物	外観	建物や周辺の色彩との調和を図ること。配色数は可能な限り少なくするように努めること。
さく塀	外観	色彩は周囲の自然やまちなみの色調と調和したものとし、アクセントとなる色はごく限られた箇所に限定するように努めること。

■表　熊本城周辺地域特別指針（色彩に関するもの）

建築物工作物	外観	建築物等は、地域の雰囲気を損なわない形状や色彩とするとともに、城内の高い所からの視線に配慮して屋上やバルコニーを緑化するなどの修景を行うこと。

●外壁基調色の分布

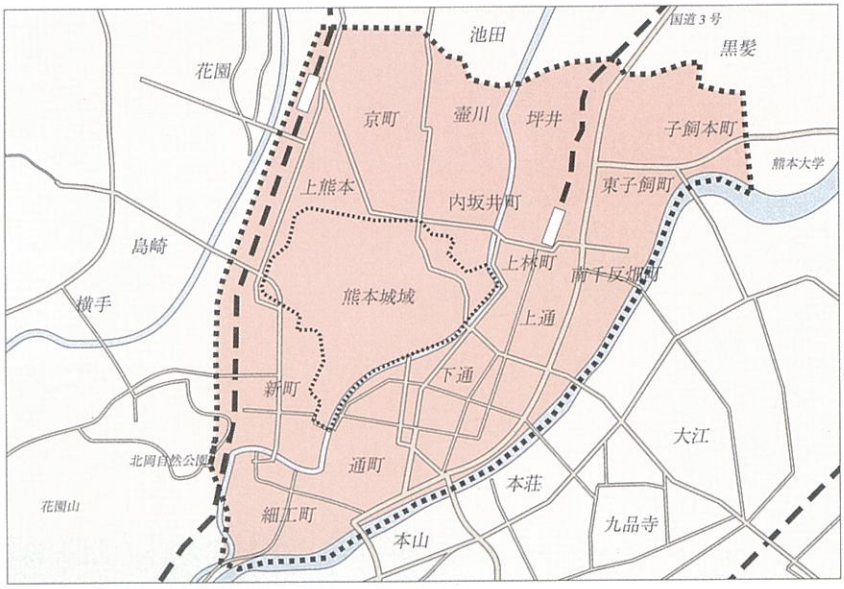


明度・彩度にばらつきがありますが、ほとんどの建物はYR（黄赤）系、Y（黄）系の色相を基調としており、典型的な「色相調和型」のまちなみになっていることがわかります。

■写真　熊本城

■写真　熊本城天守閣から見た熊本市街

熊本城周辺地域



■図　熊本城周辺地域の範囲

5-2-4　熊本城周辺地域の色彩ガイドライン案

熊本城からの眺望に基調色を感じさせるようにしよう

熊本の経済の中心地であるこの地域には、比較的規模の大きい建物が数多く集積しています。現況においてはYR(黄赤)系やY(黄)系色相の建物が多くを占めていますが、これとは異なる色相の数少ない建物がまちなみの基調色を乱しています。

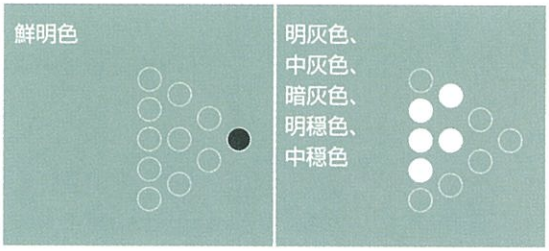
活発な経済活動に伴う幅広い建築物や工作物の整備を想定して、色彩ガイドラインでは、鮮明色を除く幅広い色彩を選択肢に含めていますが、これらのトーンの中でも、落ちつきのある左下の図のようなトーンを推薦します。

熊本城の周囲には威厳のある天守閣と調和するよう、明るさを抑えた建築物も多く見られます。こうした建物のように、中穏色や暗穏色などを用いると、より落ちつきのある景観をつくり出すことができます。

また、有彩色を用いる場合は、Y(黄)系やYR(黄赤)系の色相を中心に用い、「色相調和型」の色彩景観をより明確なものにしましょう。

■表　熊本城周辺地域の外壁基調色の色彩ガイドライン案

避けた方がよいトーン(●)	推薦トーン(○)
鮮明色	明灰色、中灰色、暗灰色、明穏色、中穏色



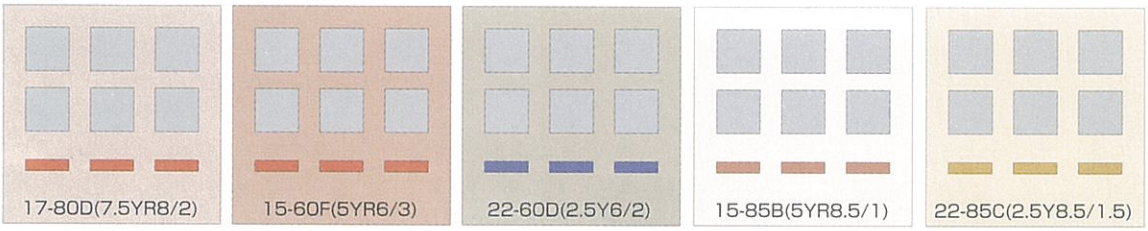
※1―表面に着色を施していない木材や土壁、金属板、スレート、ガラスなどの素材色は、この色彩ガイドラインの適用を除外します。
※2―各トーンの色彩の範囲は、19ページの一覧表を参照してください。

屋上広告の設置を控えよう

熊本城周辺地域は、同規模の都市と比較すると屋上広告の掲出数は少ないと思われます。

対比的な色使いが中心の屋上広告の設置を控え目にするだけでも、まちなみの色彩が風格を増すはずです。少なくとも現状を維持し、更新に際しては、色彩のトーンを落とすなどして、景観の維持・改善に努めましょう。

■熊本城周辺地域の推薦配色



現況をふまえて、熊本城周辺ゾーンでは、YR(黄赤)系やY(黄)系色相を基調色とします。鮮やかなアクセント色は通り沿いの低層部・基壇部に集中させ、熊本城からの眺望をすっきりと整理しましょう。

■写真　熊本城周辺地域の現状

落ちつきの中にも変化を感じさせる配色の例

塔屋広告などが目立つ熊本城周辺の現況

●左―暖色系色相の明穏色と中穏色のストライプで、落ちつきの中にも変化を感じさせる配色としています。(『くまもと景観賞・テーマ賞(景観に配慮した色彩)』平成4年受賞)
●右―熊本城周辺地域の建物の多くはYR(黄赤)系、Y(黄)系などの色相を基調としていますが、熊本城から眺める市街は、広告物などによって基調色を感じさせないまちなみになっています。

■写真　景観色彩シミュレーション

熊本城周辺地域の景観と対比的な例

熊本城の屋根瓦と対比の少ない色彩に変更した例

この地域の景観の核はいうまでもなく熊本城です。
屋根や外壁の色彩は、こうした景観の核とあわせたり、対比の弱いものを選ぶ必要があります。
色彩を共有することで、景観の核と一体感のある質の高いまちなみが形成されるものです。

5-3

水前寺・江津湖地域

5-3-1　水前寺・江津湖地域の範囲

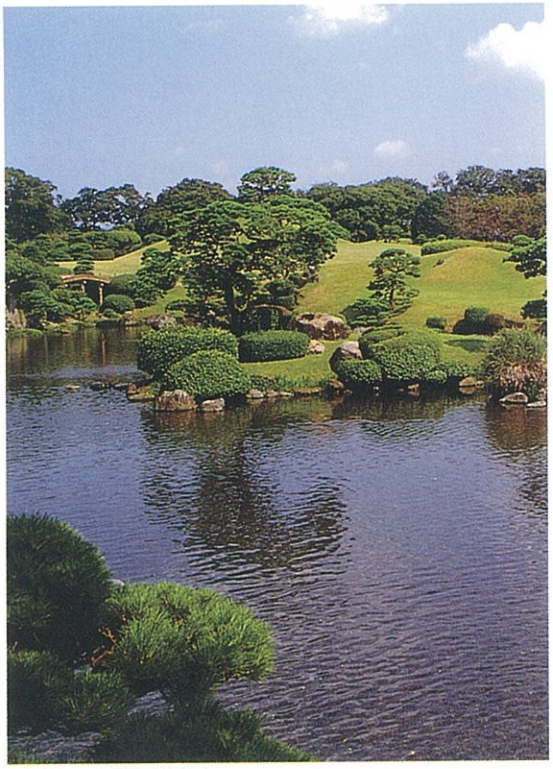
熊本市が指定する水前寺・江津湖地域は、下の図に示した範囲の地域です。

5-3-2　水前寺地域の景観形成の基本的考え方

回遊式の庭園として名高い水前寺成趣園は、熊本市を代表する名勝として広く全国に知られています。

園路からの変化に富んだ庭園の表情や古今伝授の間からの庭園の構図は、熊本市の貴重な財産となっています。

このため、公園を取り囲む樹木の上に建築物等が顔を出して、庭園景観の構図を損なうことがないように、景観誘導を進めます。



■写真　水前寺成趣園

■写真　江津湖

5-3-3　江津湖地域の景観形成の基本的考え方

江津湖（上江津、下江津）は水の都としての熊本市を最も強く印象づける場であるとともに、周辺の市街地にあっては貴重なオープンスペースとして位置づけられます。

江津湖の景観は、水鳥が戯れる湖面に代表される近景、周囲の古木や高木、田園に代表される中景、その奥に遠望される山々が織りなす遠景によって構成されていることから、これらの自然的景観を損なうことがないように、景観誘導を進めます。

5-3-4　水前寺・江津湖地域の景観形成指針

熊本市では、景観形成指針に加えて、各地域ごとに、次の表のような地域特別指針を設定しています。

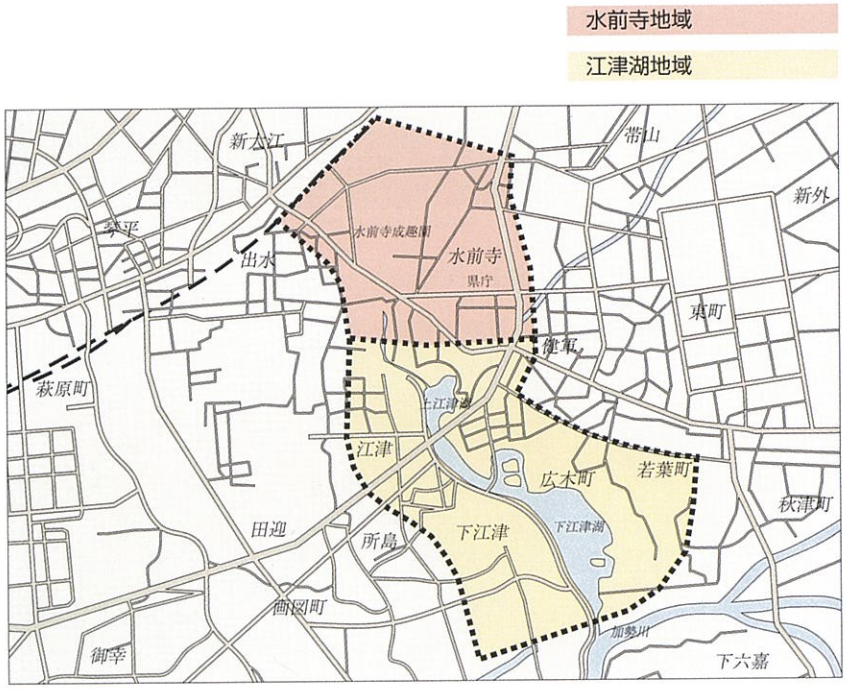
※熊本市大規模建築物等景観形成指針は、66ページの表を参照してください。

■表　水前寺地域特別指針（色彩に関するもの）

建築物　外観 工作物	水前寺公園周辺の建築物等は、庭園の雰囲気と調和した色彩およびデザインとすること。

■表　江津湖地域特別指針（色彩に関するもの）

建築物　外観 工作物	湖岸から見える建築物等は、形状、色彩が江津湖の自然的景観を阻害しないように努めること。



■図　水前寺・江津湖地域の範囲

5-3-5　水前寺・江津湖地域の色彩ガイドライン案

水と緑をいかした風格ある色彩景観を目指そう

水前寺・江津湖地域は、水と緑に包まれた自然景観を基調とし、県庁をはじめ公園、体育館、図書館などの公的施設が多数立地しています。
市民の身近な憩いの場として親しまれている水前寺公園、江津湖やそこから遠望できる山々などの自然景観と調和を保ちながら、水と緑をいかした風格ある色彩景観づくりを目指します。

中高層の建物は中穏色で落ちついた雰囲気を演出しよう

中高層の建物は明るさを抑えた中穏色を基調とし、周辺の自然と一体化した落ちつきのある色彩を基本に外観デザインを行います。
また、高層階に掲げる広告物の色彩は外壁面と同色を基調にするなどして、風格のある色彩景観をつくります。

低層の建物には灰色や暗穏色の屋根をつけよう

また、一般の住宅や商店など、低層の建物は灰色や暗穏色の勾配屋根をつけるなどして、遠い視点や高い視点から見たときに、緑に融和しやすい配色になるように心がけます。

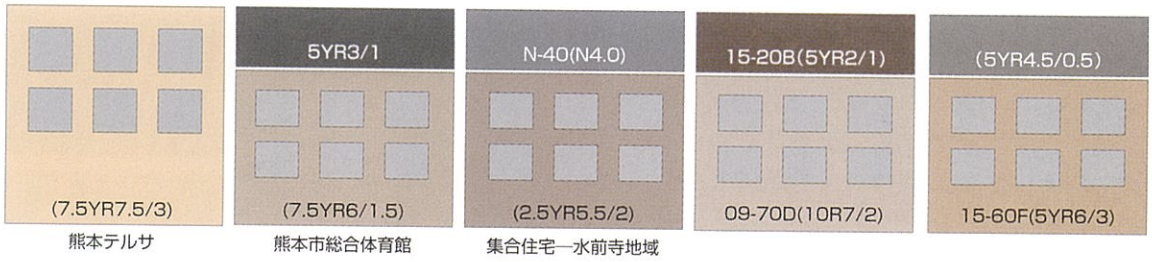
■表　水前寺・江津湖地域の外壁基調色の色彩ガイドライン案

避けた方がよいトーン(●)	推薦トーン(○)
明清色、暗清色、鮮明色	明灰色、中灰色、明穏色、中穏色

※1―表面に着色を施していない木材や土壁、金属板、スレート、ガラスなどの素材色は、この色彩ガイドラインの適用を除外します。
※2―各トーンの色彩の範囲は、19ページの一覧表を参照してください。

■水前寺・江津湖地域の推薦配色

この地域では、中穏色の外壁と暗灰色や暗穏色の屋根が配色の基本になります。
また、色彩ばかりでなく、材質感や形態の面でも品格が保たれるよう留意します。



■写真　水前寺・江津湖地域の現状

●左―つやを抑えた中穏色の無釉タイルが外装の基調になっています。近景での外観が単調にならないよう、数色のタイルを混ぜ貼りしています。
●右―中央の体育館は、暗穏色の勾配屋根をつけることによって、風格づくりと自然との融和を成功させています。

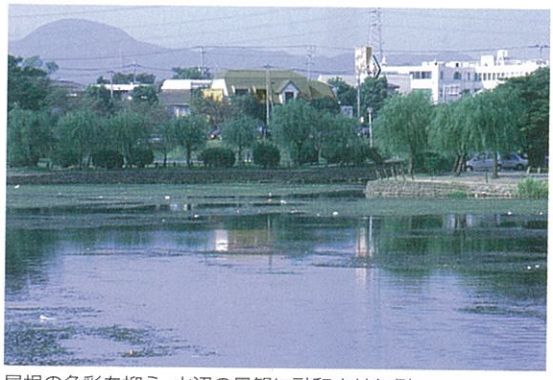
中穏色のタイルを混ぜ貼りした建物の例

暗穏色の傾斜屋根をつけて江津湖からの眺望に配慮した例

■写真　景観色彩シミュレーション

江津湖周辺には鮮やかな色彩を屋根や壁の基調とした建物が少なくありません。
自然地に隣接してこうした緑と対比の強い色彩が存在すると、時間や季節とともに姿を変える自然の色彩に目が向けられなくなってしまいます。
また、水面上にも鮮やかな色彩が倒景となって現れます。
彩度の高い色材は、一般的に退色しやすく、飽きられやすいものです。

水前寺・江津湖地域の景観と対比的な例


屋根の色彩を抑え、水辺の景観に融和させた例

5-4

歴史的まちなみ地区

●1―熊本市川尻地区
●2―菊池市御所通り地区
●3―不知火町松合本通り地区

5-4-1　歴史的まちなみ地区について

熊本県には、地域の風土や文化、産業などを反映して形作られてきた歴史的なまちなみが随所に見られます。
近年、こうしたまちなみに暮らす人々の中から、地域の生活や文化を伝える資源として、その景観を保全するとともに、地域活性化の手段として積極的に活用していこうという声があがっています。
ここに挙げる3つの地区では、こうしたまちなみの中でも特に主体的な試みが展開されており、まちなみに暮らす人々が、景観形成住民協定を締結したり、建物の建設基準等を設けるなど自らのまちなみにふさわしい建物を整備していこうと努力しています。

5-4-2　景観形成住民協定

菊池市御所通り地区および不知火町松合本通り地区においては、景観形成住民協定が締結されており、このうち色彩に関わるものとして、次のような基準が設けられています。

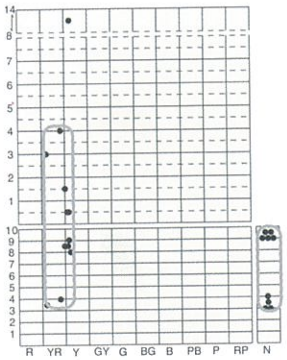
建物の色彩は、無彩色等落ちつきのある色を基調とする。

■図　歴史的まちなみ地区の位置

5-4-3　歴史的まちなみ地区の色彩景観づくりの基本的考え方

歴史的まちなみ地区には、それぞれが刻んできた歴史の中で蓄積された伝統的な色彩や配色があります。
色彩景観づくりにあたっては、こうした色彩や配色を知り、それをいかしていくことが必要です。
●1―地域の環境を知り、いかす努力をする。
●2―地域に根付いた色彩や配色をいかす。
●3―地域に伝わる素材・建材をいかす。
●4―まちなみの色彩の連続性に配慮する。
●5―騒色を取り除く。

●外壁基調色の分布―御所通り地区

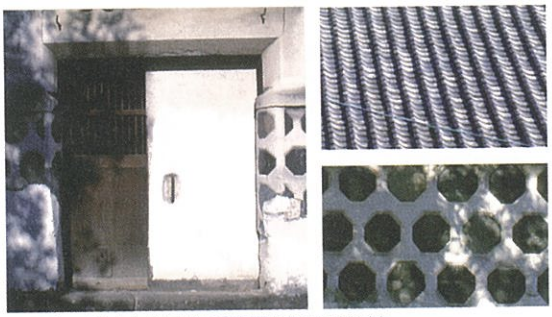


5-4-4　伝統的な材料と配色の典型

3つの地区では、建築形態や規模は少しずつ異なるものの、漆喰壁と燻し瓦の屋根という無彩色による構成が配色の典型になっています。

白や暗灰色などの無彩色を基調とした建物と、茶系の木材などを基調とした建物が多くみられます。
一方、非常に彩度の高い黄色を基調とした建物もみられます。

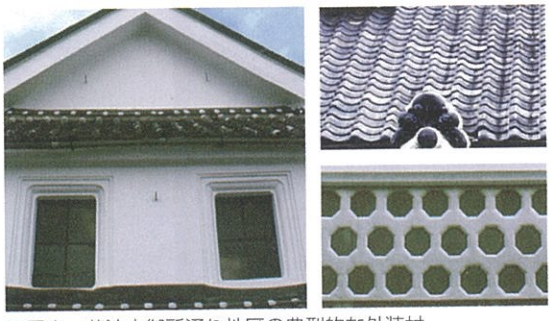
●1―熊本市川尻地区



■写真　熊本市川尻地区の典型的な外装材

昔ながらの造り酒屋など、白漆喰壁の建物が数多く現存しています。
漆喰に墨を塗り込んだものも多く見られます。
灰色と白のなまこ壁や焼き板の腰壁をとりつけた建物も見られます。
屋根は、燻し瓦が主体になっています。

●2―菊池市御所通り地区



■写真　菊池市御所通り地区の典型的な外装材

白漆喰壁の建物が数多く現存しています。
漆喰に墨を塗り込んだものも見られます。
屋根は、燻し瓦が主体になっています。
また、白壁の歴史的な建物の意匠をモチーフにした新しい建物や、素材・意匠を統一した看板なども整備されはじめています。

●3―不知火町松合本通り地区

■写真　不知火町松合本通り地区の典型的な外装材

白漆喰壁の建物が数多く現存しています。
灰色と白のなまこ壁や焼き板の腰壁をとりつけた建物も見られます。
なまこ壁のしくみなどを説明するまちなみ資料館も整備されています。
屋根は、燻し瓦が主体になっています。

5-4-5　歴史的まちなみ地区の色彩ガイドライン案

無彩色を基調にした地域の色彩景観を踏襲しよう

3つの地区の建物は、白壁、燻し瓦に代表される無彩色の外壁や屋根と、木製の建具で統一され、整然とした色彩景観をつくりあげています。色彩ガイドラインでは、さまざまな機能や規模の建築物や工作物に対応するため、彩度の低い明穏色、中穏色、暗穏色も許容していますが、「白と黒の川尻」などという愛称に現れるほど地域の人々に親しまれ、地域の中で洗練されてきた色彩景観をもつ歴史的まちなみ地域では、これらの配色を踏襲した、無彩色による配色を基本とします。

地域の合意を深め、「騒色」を取り除こう

また、建築物ばかりでなく、広告物や公共サインなどの色彩にも配慮し、まちなみの連続性を乱す「騒色」を持ち込まないように住民間の合意を深め、地域の設計者や施工者を軸に、「歴史的まちなみ」という統一されたイメージのもとに、よりきめの細かい色彩景観づくりを進めていくことが重要です。

■表　歴史的まちなみ地区の外壁基調色の色彩ガイドライン案

避けた方がよいトーン(●)	推薦トーン(○)
明清色、暗清色、鮮明色	白、明灰色、中灰色、暗灰色、黒

■歴史的まちなみ地区の推薦配色

※1—表面に着色を施していない木材や土壁、金属板、スレート、ガラスなどの素材色は、この色彩ガイドラインの適用を除外します。
※2—各トーンの色彩の範囲は、19ページの一覧表を参照してください。

3つの地区の建築形態や規模などは異なりますが、配色の典型はほぼ共通しています。暗灰色の燻し瓦に白や墨塗りの漆喰壁が基本となっており、これになまこ壁や板壁などの腰がとりつけられています。

造り酒屋—川尻地区	商店—御所通り地区	公営住宅—御所通り地区	資料館—松合本通り地区	住宅—松合本通り地区
(5YR2.5/0.5)	(5YR2.5/0.5)	N-30(N3.0)	(5YR2.5/0.5)	(5YR2.5/0.5)
N-95(N9.5)	N-40(N4.0)	N-90(N9.0)	N-95(N9.5)	N-95(N9.5)
15-60F(5YR6/3)		(10YR7.5/0.2)		15-30F(5YR3/3)

■写真　歴史的まちなみ地区の現状

●左—古くからある造り酒屋の外壁を保存しています。自動車の接触などによって損壊した箇所もていねいに修復しています。
●右—歴史的まちなみの連続性を妨げないように、周辺と配色をそろえた公営住宅の例です。ゲートや休憩所に庇や屋根などをつけ、建物本体にも勾配屋根をつけるなどして、スケール感を抑える努力をしています。

手入れの行き届いた造り酒屋—熊本市川尻地区

歴史的まちなみに配慮した新しい集合住宅—菊池市御所通り地区

■写真　景観色彩シミュレーション

写真の建物は、無彩色の外壁が連なる中に、他とは明らかに異なる黄色に外壁を塗装しています。周辺のまちなみと対比が強いことから目立ちはしますが、まちなみの連続性を大きく妨げています。
鮮やかな色彩は、前面にある黄葉したイチョウの葉のように季節感を感じさせる可変性のある要素にまかせて、建物はその背景になるような色彩を基調とすべきです。

歴史的まちなみ地区の景観と対比的な例—菊池市御所通り地区

外壁基調色の彩度を下げて、黄葉が映えるようにした例